

第4回俳句賞「25」奨励賞受賞「星の凶鑑」受賞コメント

垂水文弥さん

今回の連作の俳句はほとんどがコロナウイルスの流行が始まってからの約一年の間に作られたものです。その間、なかなか外出も出来ず普段なら毎日のように会っていた人とも会わなくなり、非常に繋がりが弱くなるのを強く感じる時期が長くありました。そんな中で、誰かの俳句を読むことでその人の感性に触れられることが非常に支えになりました。ある人が美しいと思ったものを同じように美しく思い、悲しいと思ったことを同じく悲しく思い、嬉しく思ったことを同じように嬉しく思う。そんなときに時間も空間も越えて誰かと繋がっていることを感じられました。今回、この俳句賞「25」の大賞と言う非常に光栄な賞をいただき、審査員の先生方から身に余るようなお言葉を頂戴しました。この作品が、前に私が感じたような、読んだ方との間にささやかながらも確かな橋を渡してくれる作品となってくれていれば、とても嬉しく思います。

重田渉さん

それぞれ句の響き合いには細心の注意を払ったつもりです。私達は俳句賞「25」の連作を作るにあたって、もともとそれとは関係なしに作ってあった句を持ち寄って一つの作品としたのですが、優れているであろう句を単純に並べてみても、やはり内容や技法、音韻の重複がどうしても出てしまいます。そこで連作としての見苦しさを軽減するべく、句の選定や並べ方の見直しをするわけですが、これには予想以上の時間がかかりました。それぞれの句の長所短所を評価し、他の句との接合した響きに理由を見出してやるという議論のまとまらない様は、「余白」で語ることの多い文芸という性質を思い起こさせるのに十分でしたし、同じものを見続けていると些細なことが気にかかってしまうという人間の性質も露呈させてくれました。しかし他チームの作品も鑑賞してみて、各員に加えて「zoom会議」という一つの人格が新たに生まれることによって、さらに作品の深さが変質するのだろうとも感じました。

佐伯冴人さん

まずは、大賞を獲得できて非常に嬉しかったです。チーム全員で一つの作品を作り上げるというのは、他の俳句大会や部活ではなかなか経験することがないことで、嬉しかったです。チーム五人、まさしく五人五色で、句の雰囲気も好みも違う中、zoom や学校で意見を交わし、五人それぞれの良さが活きた作品になったと思います。個人としては、占めた句数としては少なかったのですが、とても気に入っている句を出して、先生方の講評をいただけたことがとても嬉しかったです。他チームの方の作品を読むと、こちらのチームには全くなかった発想やものの見方がたくさんあり、勉強になりました。また、改めてチームメンバーの心強さを感じる事が出来ました。

佐々木啄実さん

一句一句の選定においても勿論多くの時間を費やしたのですが、作品のタイトルに関してはかなり揉めました。句群全体のイメージと響きあう言葉を選びたかったのですが、なかなか全員が納得する言葉は見つかりませんでした。『星の図鑑』というタイトルは最初から候補には挙がってはいったものの、神野紗希先生の『星の地図』が思われてしまって勿体ないのではないかとということで、最後まで検討を重ねていました。最終的には全員で納得しましたし、様々なタイプの句を織り込んだ作品のタイトルとして、五人の個性を象徴するものになったのではないかと考えています。議論は全て zoom を用いて行ったのですが、コロナ禍で学校の授業や句会に zoom を使って慣れていたおかげで、議論が円滑に進められたのが良かったと思います。現状、終わりの見えない状況ではありますが、この度頂いた賞を、いままでの活動の一つの痕跡として、これからも俳句と誠実に向き合っていく所存です。

谷田部慶太さん

複数人で一つの連作を編むというのはとても貴重な経験でした。タイトル付きの数十句の中にはふつう、作者が自分自身の俳句しかないはずなのです。雰囲気にそぐわないからと言って連作から外した自分の作品は数多くありましたが、他人の作品を切り捨てたのはこれが初めてのことでした。雰囲気にそぐわない句とは、言い換えればその句には作者の個性が色濃く出ているということです。個性の強い句を削ることが連作にとって必ずしも良い作用をもたらすわけではなく、削りすぎると作品全体を平凡にしてしまう危うさがあるのには苦労させられました。今回の作品で私たちの個性がどれだけ発揮できたかはわかりません。今後も俳句賞「25」に挑戦する機会がありましたら、「傷が少ない作品」以上の、個性みなぎる作品を目指したいと思います。